

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

ラルフ・リントンのマダガスカル調査とマダガスカル文化領域論の系譜

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館, National Museum of Ethnology 公開日: 2012-05-17 キーワード: 作成者: 深澤, 秀夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00000940

第2章 ラルフ・リントンのマダガスカル調査と マダガスカル文化領域論の系譜

深澤 秀夫

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

ラルフ・リントンが1926年から翌27年にかけておこなったマダガスカルほぼ全島にわたる広域的調査の成果「マダガスカルにおける文化領域」(1928年)および『タナラ族 マダガスカルの山地民』(1933年)は、F. ボアズ以来アメリカ文化人類学が北米先住民の調査を通じて洗練してきた調査項目と調査手法、さらには文化領域概念を直接に適用した、マダガスカル研究史上はじめての文化／社会人類学ないし民族学的領域の基盤に立った領域区分論および民族誌である。この2つの著作に示される研究目的と方法は、「民族の実体論」に立った明らかな時代的限界を示している一方、専門の文化人類学的教育を受けた人間が1年半をかけてほぼマダガスカル全島を踏査するという広範な調査は、リントンの前にもまたその後にも生まれることがなかった。マダガスカル島住民の場合、相互理解性を持ちまた同一言語系統に属するマダガスカル語を使用していることが、文化や社会の研究者たちによってその文化的共通性ないし斉一性の存在根拠として言及され、その一方、〈マダガスカル人〉意識と〈族〉への帰属意識が明確に共存していると指摘されている。〈マダガスカル人〉をめぐるこのような文化・社会的な特質を踏まえ、斉一性と多様性の問題を考える場合、リントンの文化領域区分は常に参照されるべき貴重な経験の開示であると共に、とりわけボアズ自身が意図したように博物館などにおいて〈マダガスカル人〉に関する展示を行う場合には、区分そのものが現在なお具体的な有用性を保持している。

- | | |
|---------------------------------|----------------------------------|
| 1 マダガスカル地域関連民族誌におけるリントンの成果の位置づけ | よる批判 |
| 2 リントンのマダガスカル調査とフランス植民地期マダガスカル | 5.2 アメリカ文化人類学によるマダガスカル研究への影響 (1) |
| 3 リントンによるマダガスカル文化領域区分 | 5.3 アメリカ文化人類学によるマダガスカル研究への影響 (2) |
| 4 民族誌『タナラ族 マダガスカルの山地民』 | 5.4 アメリカ文化人類学によるマダガスカル研究への影響 (3) |
| 5 リントン文化領域論の与えた影響とその評価 | 5.5 アメリカ文化人類学によるマダガスカル研究への影響 (4) |
| 5.1 フランスの民族学者ラヴォンデスに | 6 リントンによる文化領域論設定の意義と問題点 |

*キーワード：マダガスカル、ラルフ・リントン、タナラ、文化領域、民族誌、斉一性、多様性

1 マダガスカル地域関連民族誌におけるリントンの成果の位置づけ

マダガスカル島とその周辺島嶼域は、1896年から1960年までフランスの植民地であり¹⁾、

当然の事ながら、この間のマダガスカルをめぐる人文・社会系地域研究の圧倒的多数は、フランス人の手になるものである。デカーリやデシャン、デュボワなどの著作（Decary 1933; Deschamps 1936; Dubois 1938）が、フランス人によって執筆されたマダガスカルにおける個別民族を対象とした初期の民族誌として挙げられよう²⁾。したがって、本章4節で詳述するリントンの『タナラ族 マダガスカルの山地民』（Linton 1933）は、単に英語で記述された民族誌というだけでなく、この脈絡において先駆的な民族誌的成果に位置づけられるものである。さらに、デカーリとデシャンが行政官、デュボワが神父であることに鑑みれば³⁾、リントンの著作は、専門教育を受けた文化／社会人類学者の手になるマダガスカル地域における最初の民族誌と言えよう。

一方、フランスの民族学者による民族誌は、フォブレによるバラ族についての民族誌（Faublée 1953）が嚆矢になる。しかしながら、フランス民族学者によるマダガスカル地域研究そのものが活発化するのには、さらに年代が下がり、コンドミナス（Condominas 1960）およびオティノ（Ottino 1963）の著作が出版される1960年代を待たなければならない。

リントンのマダガスカル調査は、当時学芸員（Assistant Curator）として所属していたシカゴの自然史博物館（the Field Museum of Natural History）が派遣したマーシャル団長マダガスカル野外調査隊（Captain Marshall Field Madagascar Expedition）の一員として、1926年から1927年にかけて実施された。この野外調査隊が派遣された背景および調査目的について、リントンは「マダガスカルは、マレー民族学に対する自然史博物館の以前からの関心の一環として調査地に選ばれた。この島はマレー民族の最西端の到達地であり、そこにおける調査は、初期マレー文化を明かにするものと期待された」（Linton 1933: 15）と述べている。リントンのマダガスカル調査の成果は、『タナラ族』を含めた10本の関連論文等として1927年から1943年の間に発表されている。下記は、リントンが公表したマダガスカル関連著作の一覧である（cf. Gillin 1954: 274-281）。

- 1) 1927 “Report on work of field museum expedition in Madagascar from January to September 9, 1926”, *American Anthropologist* 29(3): 292-307.
- 2) 1927 “Rice, a malagasy tradition”, *American Anthropologist* 29(4): 654-660.
- 3) 1927 “Witches of Andilamena”, *Atlantic Monthly* 139: 191-196.
- 4) 1928 “Culture areas in Madagascar”, *American Anthropologist* 30(3): 363-390.
- 5) 1928 “Market day in Madagascar”, *Asia* 28(5): 386-389.
- 6) 1930 “Use of tobacco in Madagascar”, In *Tobacco and Its Use in Africa*, Field Museum Leaflet 29, pp.38-43.
- 7) 1933 *The Tanala, a hill tribe of Madagascar*, Chicago: Field Museum of

Natural History, 334p.

- 8) 1939 “The Tanala of Madagascar”, In Kardiner, Abraham (ed.) *The Individual and His Society*, New York: Columbia University Press, pp.251-290.
- 9) 1939 “Culture sequences in Madagascar”, *Transactions of the New York Academy of Sciences* 7: 116-117.
- 10) 1943 “Culture sequences in Madagascar”, *Studies in the Anthropology of Oceania and Asia in memory of Roland Barrage Dixon*, Cambridge: Peabody Museum, pp.72-80.

本稿では、リントンのマダガスカル調査の足跡と調査成果について、「マダガスカルの文化領域」(Linton 1928) および『タナラ族』の論考2点を中心に見てゆくと共に、その文化領域論がその後のマダガスカル地域研究に与えた影響と評価を回顧する中で、マダガスカルの文化／社会の斉一性と多様性をめぐる議論の今日的可能性について検討する。

2 リントンのマダガスカル調査とフランス植民地期マダガスカル

リントンのマダガスカル調査については、1927年発刊の『アメリカ人類学雑誌』29巻3号に掲載された「1926年1月から9月9日までのマダガスカルにおける自然史調査隊の活動報告」および『タナラ族』の序文によって、その日程と活動の概要を知ることができる(Linton 1927, 1933)。

それらによれば、1925年10月、リントン一行はシカゴを出港し、フランスに短期滞在、マルセイユを経由し、マダガスカルへと向かった。その際、パリの植民地省において、退職後の外交官フェラン(Paul Gabriel Ferrand, 1864-1935)と面会し、マダガスカルについての民族学的情報および現地情報を収集している。

フェランは、1864年1月22日マルセイユに生まれ、その後パリで学び、東洋語学校でマレー語の学士号を修得した。外務省領事部所属中に、最初タマタヴ(1887年3月16日)、次にマジュンガ(1888年5月25日)、最後にマナンザーリ(1890年4月8日)に勤務し、1891年、彼の最初の著作『マダガスカルとコモロにおけるイスラム教徒』を出版した。彼はまた、〈スラベ〉(sorabe)と呼ばれるアラビア文字で筆記されたマダガスカル語手稿を解読した先駆者の一人である。以上の任地の他にも、彼は副領事としてマジュンガに(1895年7月)、次に代理公使としてタマタヴに(1896年1月)滞在した。このマダガスカルにおける10年間の滞在に基づき、フェランはマダガスカル語の修士号を修得した上、パリに5年滞在する間にマレー語との比較を行い、博士論文『マレー語とマダガスカル語方言の比較音韻論的考察』によって文学博士号を取得、出版した。フェランは、

1918年4月1日外務省本省に配属となり、1920年公職を引退した後、1935年2月3日に亡くなっている (L'Academie des Sciences d'Outre-Mer 1979: 199-200)。

リントン一行のマダガスカルにおける行程や調査地の選択には、このフェランによる情報提供が大きな影響を与えたものと思われる。『タナラ族』の前書きの最後においても、最初にフェランに対し謝辞が献呈されている。このことを逆に考えれば、このマーシャル団長マダガスカル野外調査隊が派遣されるまでアメリカには、マダガスカル地域に関する文献を含めた有形無形の資料と情報の蓄積が無かったこと、とりわけ人文・社会系専門研究者が居なかったことを物語っている (注3を参照)。

マダガスカル到着後の足跡は、次の通りである。1926年1月17日リントン一行、マダガスカル最大の港町東海岸の Tamatave 港に到着。⇒総督府の所在地 Tananarive に2ヶ月滞在。⇒4月中央高地の町 Ambositra において Betsileo 族について調査。⇒5月中央高地にある Alaotra 湖地域において Sihanaka 族について調査。⇒7・8月北東部の Antongil 湾から内陸を踏破し、北西海岸の町 Antsohihy に出て、8月 Majunga に着く。この間に Betsimisaraka 族、Tsimihety 族、北 Sakalava 族について調査。⇒Betsiboka 河沿いに北西内陸部の町 Maevatanana から Kandreho の町を踏破し、中央 Sakalava 族について調査。⇒9月 Tananarive に戻る。⇒11月東海岸の港町 Tamatave から東南部の町 Farafangana まで Pangalana 水路を船で移動。⇒東南部の町 Farafangana を中心に、2ヶ月間 Antaifasina 族と Antaimorona 族について調査。⇒1ヶ月間南東部の町 Fort-Dauphin に滞在。⇒南東部の町 Fort-Dauphin から南西部の町 Tulear まで踏破し、4月 Tulear の町に到着。1ヶ月間、Tulear を基点に Vezo 族と Sakalava 族について調査。⇒中央内陸南部の町 Betroka において Bara 族について調査。⇒中央高地南部の町 Ambalavao において Betsileo 族について調査。⇒2ヶ月間南 Ambohimanga に滞在し、Tanala 族について調査。⇒Tananarive に戻る。⇒1927年 Tamatave 港から出港、フランスを経由してアメリカに帰国した。

リントン一行がマダガスカルに到着した時、1896年のフランス共和国国民議会によるマダガスカル領有化の議決から、既に30年以上の年月が経過していた。フランスによる植民地支配はマダガスカル全島にくまなく確立されており、そのことはリントンの1927年の報告からも読み取ることができる。「今日では、無償の荷担ぎ人足は実質的にはほぼ徴募できない。人足は、一種の税として荷担ぎ仕事を果たすため、政府から提供される。賃金は、県 (district) によって若干異なるが、通常食事なしで一日4フラン、帰路につき一日2フラン、旅行中は人足一人当たり一日につき6フランが現行賃金として必要となる。荷担ぎ人足は普通、県庁所在地毎に交代となり、以前の人足たちは自分の県へと帰ってゆく。強制労働のため、不平や仮病はしょっちゅうだが、逃亡はまれであり、また荷を盗むことはほとんど無かった」(Linton 1927: 293-294, カッコ内は筆者による加筆説明), 「旅行中は、村の家に宿泊する。各原住民の大きな村では、ヨーロッパ人の旅

行者たちが使うために供される家がある。適正な価格でヨーロッパ人の旅行者たちに食糧が提供されるよう配慮するのは村長の義務である」(Linton 1927: 294)。

その一方、フランスによる支配を当時の各地の住民が必ずしも快く受け入れていた訳ではないことは、「原住民たちは、おしなべて政府に関する事柄や政府に関する人間を疑いの目で見ている」(Linton 1927: 297)、「(シハナカ族調査では)原住民の宗教についての、とりわけ妖術慣行についての貴重な情報を多く収集することができた。しかしながら、不幸なことに私の最も信頼できるインフォーマントが、私が激しい熱に襲われた時、私に毒を盛ったと疑われ、政府ともめごとになることを恐れた他の原住民によって殺害されてしまった」(Linton 1927: 303-304, カッコ内は筆者による加筆説明)、「(ツイミヘティ族調査では)武器類は収集できなかった。なぜなら、原住民たちは、そのようなものを私に見せることで政府によって捕まることを恐れていたからである」(Linton 1927: 304-305, カッコ内は筆者による加筆説明)などの記述から窺い知ることができる。

このような個別住民の日常生活レベルにおけるフランス支配に対する不満や抑圧感のみならず、マダガスカルからも41,000人が「志願して」マダガスカル人連隊として参戦、4,000名の戦死者をだした第一次世界大戦は、フランス支配に対抗するマダガスカル・ナショナリズムを広範囲に生みだしつつあった。第一に、伝統主義と近代主義とが巧みに織り交ぜられロシアを破って発展しつつある日本をマダガスカルの進むべきモデルとすることを訴えたラヴェルザウナ牧師の「日本と日本人」と題する1912年発表の論説記事の主張に共感を覚えた医学専門学校生、公務員、教員、事務員を中心に1913年に結成されたフリーメーソン団VVS (Vy, Vato sy Sakelika : 鉄と石と芽の会)が、戦間中の植民地における民族主義の高揚を恐れるフランス当局によって1915年に摘発され、訴追された者の多くが流刑・強制労働・公職追放などの厳しい判決を受けていた。第二に、大戦中の財政難を補うために実施された牛頭税の導入に反対する農民によるサディアヴァへの反乱が、1915年から1917年にかけて南部一帯で生じた。第三に、マダガスカル人の漠たる被差別意識と不満を、第一次世界大戦の退役軍人であり社会主義者でもあったジャン・ラライムングとその支持者たちが、「マダガスカル人ナショナリズム」の政治運動へと導き始めていた。その直接のきっかけは、1901年に制定された〈原住民司法制度〉によって、マダガスカル人がフランス共和国〈市民〉(citoyen)ではなく〈臣民〉(sujet)という法的身分と定められ、フランス市民とは異なる現地法に従い、現地裁判所で裁かれることとなったことにある。ラライムングらの目標は、同じフランス市民としての法的また政治的な平等の実現と獲得であった。1922年にマダガスカルに帰国したラライムングは、北部の港湾都市ディエゴ・スワレスを中心に新聞を発行して自らの主義主張を喧伝し、またフランス人入植者によるマダガスカル人の土地権利侵害に対する抗議行動

などを展開した (Boiteau 1982: 320-334; エスアベルマン ドルウス 1988: 352-355)。

リントン一行がマダガスカルに到着した同じ1926年、〈公共工事のための労役制度〉(略称 SMOTIG) が制定された。これは、植民地政府が指定した建設現場等へ第二次徴兵者を2年間から3年間の労働に送り込む制度である。公共資本を整備するための労働力の徴募に苦慮してきた植民地政府の側の視点に立てば、SMOTIGはそのための廉価で手頃な解決策であり、一方マダガスカル人にとって SMOTIG とは、「新たに導入された形を変えた奴隷制」であり、嫌悪と忌避の対象にほかならなかった。実際にも、1927年から始まったフィアナランツアとマナカラ間163kmの鉄道敷設には、この SMOTIG によって徴募されたマダガスカル人労働者たちが投入されていた。この SMOTIG の廃止が、その後のマダガスカル人ナショナリズム運動の具体的な目標の一つとなった。さらに、リントン一行がマダガスカルを去った2年後の1929年には、フランス市民権の獲得と原住民司法制度廃止を求めるマダガスカル人の街頭行動が総督府の所在地タナナリヴにおいて発生し、前期ナショナリズム運動が頂点を迎えていた (Boiteau 1982: 333-344; エスアベルマン ドルウス 1988: 354-355)。

リントンの調査報告の中では、各民族についての概況とそこでの調査活動および収集品の状況が丁寧に報告されているものの、このような当時のマダガスカル人のナショナリズム運動についての言及は見出されない。

3 リントンによるマダガスカル文化領域区分

調査報告ではなく、マダガスカル現地調査資料に基づいた本格的な論文として帰国後最初にリントンが発表したのが、1928年の『アメリカ人類学雑誌』30巻3号に掲載された「マダガスカルにおける文化領域」である。帰国から短期間で論文執筆がなされたため、具体的な文化要素の記述が全27ページの論文の実に25ページを占めている。しかしながら、1年半以上の月日をかけ、マダガスカル全気候帯およびほぼ全民族を踏破した文化人類学専門研究者としてのリントンが抱いたマダガスカル文化の斉一性と多様性についての基本的印象と情報が、この論文全体に充溢している。論文の序論部において、文化領域区分設定の妥当性と具体的範囲についてリントンは次のように述べている。

マダガスカルについて論じている全ての人間は、事実上、この固有の文化は全島にわたり同質である (uniform) ことを何の根拠もなく (a priori) 前提としている。実際には、単一の部族ないし単一のクランが行ったり信仰しているだけにもかかわらず、〈マダガスカル人〉はかくかくしかじかの事をしたり信仰したりしているとの言い方を、しばしば耳にする。この種の誤りは、おそらく島の大きさおよびごく少数のヨーロッパ人だけが島全体を知悉していることに起因するものである。私自身も、島における最初の1年間の滞在を単一の文化領域の内部だけでほぼ費やした結果に影響され、島の文化は驚くほど同質であると述べる過

ちを犯してしまった。多少弁解させてもらえるなら、問題の論文「マダガスカルへの自然史博物館調査隊活動報告」『アメリカ人類学雑誌』29巻292ページは、公刊を目的として執筆されたものではなかった。この論文における情報は、マーシャル団長マダガスカル野外調査団によって収集されたものであり、またその成果は、自然史博物館の好意によって出版されるものである。

混合文化に属する幾つかの少数民族を含むにせよ、マダガスカルではかなりはっきりと3つの文化領域を区分できるように思われる(図1参照)。島の主な地理的区分および気候区分と概ね一致するこれらの文化領域は、次の通りである。

- 1) 東部海岸領域：一部は北部域にも入る。ベツィミサラカ族および南部地域には、〈アンタイムルナ〉の名称のもとに誤って一括される多数の小部族が居住する。
- 2) 高原領域：ベツィレウ族、イメリナ族(一般にフヴァと呼ばれる)、シハナカ族が居住する。
- 3) 西部海岸・最南部領域：サカラヴァ族、マハファーリ族、アンタンドゥルイ族、バラ族が居住する。

タナラ族とベザヌズ族は1)の東部海岸領域と2)の高原領域の中間の文化に入り、一方北部のアンタンカラナ族とツィマヘティ族および南東部のタヌシ族は、1)の東部海岸領域と3)の西部・最南部領域の中間に入る(Linton 1928: 363-365)。

上記のマダガスカル文化領域の説明の中で、リントンが「私自身も、島における最初の1年間の滞在を単一の文化領域の内部だけでほぼ費やした結果に影響され、島の文化は驚くほど同質であると述べる過ちを犯してしまった」と書いている問題の箇所は、次の記述であろう。

原住民の文化は、ここまでの私自身の調査研究によれば、驚くほど同質である(uniform)。この同質性は、明らかに原住民自身が大いなる旅行者であることに起因するものである。彼ら自身の本来の部族領域から400マイルや500マイルも離れた所で出会うことは珍しいことではない。南東部の一集団や北部と北西部に居住する何らかのアラブの影響を受けた複数の集団を別にすれば、全ての部族の生活用品や日用品は、実質上同一である。しかしながら、各部族は幾つかの特徴を有している。織布のタイプの分布が、このことを物語っている。マダガスカル産の絹を用いたランバ(外套)の織りはフヴァ族に限られ、また図柄を織る唯一の人びとである。ベツィレウ族は、野蚕、木綿、麻を用いて織る。タナラ族はハフチャ(キナの皮の一種)を用いた美しいランバを織るが、野生種が領域内にあるにもかかわらず、木綿をほとんど用いることはなく、また蚕は全く用いない。ベツィミサラカ族は、ラフィア糸のみもしくは栽培木綿糸とラフィア糸の混紡を織る。ツィマヘティ族はラフィア糸とマダガスカル産木綿糸を織るが、大半のベツィミサラカ族よりは繊細な仕事をし、異なる模様を用いる。シハナカ族は、織りの技術を完全に忘却しており、他の部族から布を買っている。各部族は、自分たちの特産物と他の部族の特産物とを物々交換しており、交換物はこのようにして途中で価値を高めながら、しばしば数百マイルを移動する。一般に、現地産物の重要なものについては、大量に作られ低価格で販売されるセンターが存在することを見出した。この部族の相互依存は、明らかに古くからのものである。

非物質的文化は、物質文化よりもいささか多様性があるが、それでもかなり同質的である。

最も大きな違いは、葬制と政治組織にあるように思われる。宗教とその表象である、ウデイ（呪物）は、自分たちの呪医よりもよその呪医方の力の方が強いと信じられ、他の部族からこのウデイを入手することを現地人は望むものの、どの地域でもほぼ同じである（Linton 1927: 295-296）。

しかしながら、リントン自身の弁解にもかかわらず、実際にはこの報告を執筆した1926年9月時点でリントンは既に、彼自身が設定した文化領域の1) 東部海岸領域および2) 高原領域、さらにはツイミヘティやタナラなどの混交領域での調査を実施済みであった。それにもかかわらず、現地滞在中、マダガスカル文化の「同質性」の側面が強く印象としてリントンを捉えていたことを、単なる初期調査段階における誤謬ないし錯誤として処理することは適当ではない。それだけではなく、その「同質性」をもたらした要因として、民族ごとの特産品の交換とそれに伴う住民の移動をリントンが具体的に挙げていることは、現在なお十分傾聴に値する見解である。

次に、どのような具体的な細部に基づいてリントンが、マダガスカルの文化領域区分を設定したのか、私自身のコメントを幾つか交えながら項目を抜粋して見てゆきたい。

領域1 東部海岸領域

ベツイミサラカ族 (Betsimisaraka), アンタンバファアカ族 (Antambahoaka), アンタイルナ族 (Antaimorona), アンタイファシナ族 (Antaifasina), アンタイサカ族 (Antaisaka), アンタイマナンブンドル族 (Antaimanambondro)

物質文化

村：村は柵によって防御され、家屋は近親毎の集団に固まっている。

家屋：四角形でかなり大きい、寝台などの家具はない。

農耕：米、トウモロコシ、タロイモ、サツマイモを栽培。稲作においては苗代を作らず、穂刈りを行い、穂のまま貯蔵する。

家畜：牛、ニワトリ、ガチョウを飼育。豚、山羊、犬は知られてはいたが、多くの部族においてその飼育は禁忌とされる。牛は経済的には重要ではないが、富の象徴とされている。牛とニワトリだけが、供犠に用いられる。

衣裳：男性の服は、袖のない膝の上までとどく上着から成る。南部では、もともとは脇のあいたポンチョだったと言われている。この上着は、身体にあわせて作られ、ポケットが付いていることもある。腰布は、巻かない。女性は、脇からくるぶしまでを覆う布を、幅広のベルトによって固定している。歩く際には、裾からベルトまでのまっすぐな筒状の布を纏っている。この布は、胴の真ん中で編み物のポケットの中に折り込まれる。ブラウスや袖のない短いジャケットも、現在では用

においてクランは、王族・貴族・平民の3段階に位置づけられている。王族の世襲の首長が部族の王となり、貴族クランは供犠執行などの特権をもつが、自耕自作を行い、クラン間に貢納関係はない。王族は戦争能力と政治力によってその地位を獲得するものの、弱体化した場合、専制的になった場合には、他のクランがこれに代わる。

王：王は最高裁判権をもち、科料より収入を得た。また、必要な労働力を平民の間から徴募することができた。

奴隷：戦争の捕虜およびある種の罪人とその子孫たちから成る。当人は売買されるが、奴隷の家族は次第にクランの成員と見なされ、ある場合には財産をも所有した。

婚姻：クラン外婚制。科料を支払った上、示談にすれば、クラン内婚も可能。結婚は、男女自身によって取り決められる。男方から女の両親に対し、その女性の潜在的な子供の代価として少額の金が贈られる。これによって結婚は合法的となり、子供は全て父のクランに属する。異なるカースト間の婚姻は、奴隷を除き禁止はされず、子供は父のクランに帰属する。

離婚：夫の意思および夫の姦通を理由に、妻の側からも離婚が可能。妻に対して、夫の財産は分与されない。

財産と相続：荒地はクランの成員の共有。耕地は、その土地を耕作している家族の財産。クランの成員の内部では、耕地の売買が可能。妻の衣服と個人財以外の全家族財産は、夫の所有。夫の死に際し、不妊の妻に対する財産分与はなく、複婚の時には第一妻がその財産の大半を相続し、子供たちの間でも分割されるが、娘に対し牛や土地が与えられることは希である。

宗 教

祖先崇拜：祖霊は遍在し、子孫を助け、また怒った際には病気や不幸を送り、その生活に積極的に関与するものと信じられている。人は、自己の祖先だけを崇拜する。

ザナハーリ：そこから祖先が自らの力を引き出す上位の力であり、善悪2つの源である。人格化されることはほとんどなく、単数か複数かも不明。各クラン個人や動物が自己のザナハーリを持つと言われる。祖先の供犠に際して呼びかけがなされるが、単独で供犠や祈願の対象とはならない。

供犠：全ての祈願は、供犠またはその約束を伴う。家庭で行われる供犠は家長が行い、重要な供犠は各クランの世襲的な供犠司祭によって、北部では供犠柱、南部では墓で行われる。北部では司祭職には、女性が就き、その力を男性に委ねる一方、供犠の指導者として呪術師ウンピアシが介在する。南部の供犠は、「墓の長」ラヒ・キプーリによって行われ、ウンピアシは介在しない。

聖地：ベツィミサラカ族を除く各部族は、墓以外にも、新生児のへその緒を流す河を（聖地として）持っている。それまで子供は部族の成員とは見なされず、墓への埋葬

も禁止される。この河の近くに通常墓が造られ、旱魃、洪水の供犠はこの河口で行われ、ワニを用いた神盟裁判も行われる。クランが移住する場合には、その河の水を持って行き、新しい土地の河にその古い土地の聖なる河の名をつける。

ウンビアシ：呪術師を指す。北部では男女いずれの呪術師もあり、しばしば祖霊の支配下にある一方、南部では常に男性であり、祖霊の支配下にはない。呪術師は先任者から暦（ヴィンタナ）、シキーディ占い、お守りの知識を教授され、その力を得る。高位の呪術師は、占星術を行う。これらの人びとは、特に組織化やランクづけされてはいないが、司祭とは明確に区別される。

憑依：祖先または首長の霊による憑依は、北部では普通に見られる。南部にも憑依は見られるが、サカラヴァ族起源の新しいものと言われる。北部には、通常女性の問いかけに答え、病気を治療する正規の霊媒がいる。真のウンビアシは、憑依されない。

(引用者注) ここで述べられているサカラヴァ族起源の新しい憑依とはトゥルンバ (tromba) を指すものと推測される。1926年時点で上記の民族ないし地域にまでこの憑依儀礼が浸透していたことは貴重な情報資料であり、リントンが現地調査に基づいてこれらの情報を的確に収集していたことがわかる。

死者の処置

北部では、死者は大きな木製の棺に納められ、村の墓地に置かれる。土葬は、まれである。南部では各クランが単一の共同墓キブーリを持ち、首長を含めた全員がそこに埋葬される。キブーリとは、柵に囲まれた南北に長く真ん中に仕切りのある穴で、男性は北側に、女性と子供は南側に埋葬される。キブーリは、森によって覆い隠されている。ラヒ・キブーリ：キブーリに関する一切の責任を持つ、世襲的な役職。供犠司祭および慣習に対する違反の裁定者としてふるまい、集めた科料を受け取る。

死者の魂：墓または墓地に住み、地上と同じような村を形成している。再生観はないが、ある人びとの魂が動物に入り込むとする考え方が見られる。

領域2 高原領域

メリナ族 (Merina)、ベツイレウ族 (Betsileo)、シハナカ族 (Sihanaka)

物質文化

村：丘の上に造られ、堀、壁、サボテンによって嚴重に防御され、メリナ族は丸い巨石を村の入り口の扉に用いる特徴がある。メリナ王国の成立後、多くの村が放棄された結果、現在人びとは、この地方全体に2～3戸の家屋の集団に分かれて住

んでいる。

家屋：通常は厚板、貧民は藁草、現在は日干しレンガから造られ、屋根は急勾配で、家は柱の上ではなく、敷石の上に建てられる。メリナ族とベツィレウ族では、大きな木製の寝台を用いる。

農耕：水稻を主作物とし、トウモロコシ、マニオク、キビ、豆、かぼちゃ、落花生、サツマイモ、タロイモ、野菜が栽培されている。水稻は棚田で栽培され、苗代、田植え、根刈りなどの手の込んだ栽培方法がとられている。

家畜：牛、羊、山羊、豚、犬、野生猫、ニワトリ、ガチョウ、アヒルが、古くからの家畜である。牛の数は多いが、経済的には重要ではない。牛は儀礼生活の中では大切であり、牛とニワトリだけが供犠に用いられる。闘牛も重要な競技である。

衣裳：服は、男性は禪、女性はくるぶしまでの長さのキルトである。女性用のブラウスや袖のない上着は、最近になって用いられるようになったと思われる。男性も女性もランバを纏う。ランバとは、2枚かそれ以上の布が縫い合わされた大きくて長い布もしくは肩掛けである。男性は、植物を編んだあるいは動物の革や皮のびったりとした帽子を被る。女性は、帽子などを被らない。衣服は全て、布製である。赤ん坊覆いは、用いられない。ヨーロッパ風の衣裳が、今では普通である。

(引用者注) 上記の解説におけるランバと言うマダガスカル語の最も広義の意味は、ただ単に「布」を指すだけであり、「肩掛け」などの意味はそこから派生してきたものである。上記のランバをめぐる説明からは、リントン一行が通訳を介して調査を行い、調査者自身がマダガスカル語にあまり精通していなかったことがうかがえる。

社会組織

もともとの社会組織は、文化領域1と大きく異なるものではないが、王権が強化され、クランよりも家族が重要である。王は部族の土地の所有者と見なされ、その土地を兄弟や寵臣に与え、さらにそれらの人びとが小作人に転貸し、古くからの位階制と共に一種の封建制を確立している。後期メリナ王国の複雑な組織は、ヨーロッパの影響によるものである。

(引用者注) 封建制とも呼びうる政治組織を発達させたメリナ族と、クランもしくはクラン連合以上の統合組織を持たないシハナカ族を、同じ文化領域に分類することの齟齬が目立っている。

王：王は、その臣下の生命と財産に対する完全な権力を持つ絶対君主であった。王は、全耕作者の初物の献上の形をとった地代、さまざまな報酬、科料によって財政的

な裏付けを得ていた。最高裁判官の役割を果たしたが、戦争には参与しなかった。王はまた、臣下に対し強制労働を要求することができた。

貴族：統治行為にはほとんど参与せず、ほとんど全ての役職は平民によって占められていた。これらの平民の役人達は、土地を与えられた人びとと共に、古い制度の外に一種の新貴族階層を形成した。

奴隷：奴隷は2つの種類に分けられ、外国からの奴隷は家畜同様の扱いを受けた一方、奴隷所有者の部族に属する奴隷は特別の名称によって呼ばれ、多くの権利と特典を有していた。後者の奴隷の家族は、財産、自己の墓、武器を持ち、主人に従い戦争に参加することもできた。

婚姻：メリナ族とシハナカ族ではクラン内婚、ベツィレウ族ではクラン外婚である。とりわけメリナ族では、財産を保持するために近親との通婚を行う。母の異なる半兄弟と姉妹とは結婚可能であり、交叉イトコ同士は結婚が期待される一方、姉妹の子供たちあるいは姉妹の女系の子孫同士の結婚は、厳しく禁じられる。家族は父系であるが、階層間の結婚において子供は母の地位を継承する。ベツィレウ族は、男系および女系出自上の4世代内の先祖を共にする男女の結婚を禁止している。そのような関係の存在が判明した時には、結婚後でも結婚は解消される。婚姻の形態および婚資の意味づけは、文化領域1とほぼ同じ。

離婚：正当な理由なしに夫の意志により離婚された妻は、メリナ族においては、夫の財産の3分の1を得る。

(引用者注) 親族内婚・親族外婚をめぐる情報、とりわけイトコ婚をめぐる許可／禁止の関係の詳細情報の提供からは、リントンたちが質問項目表ないし調査表に頼った、それゆえ網羅的で系統的な民俗資料の収集を心がけた調査を行っていたことがわかる。

財産と相続：全ての土地は、王の財産と見なされている。荒地および牧草地も、普通は個人よりも家族によって保有されている。部族内の土地の移譲には王の許可が必要であり、王のみが部族外に土地を売却することができる。家族の財産は夫のものであるが、夫は妻が相続した財産に対する権利を持たず、その財産は直接子供に伝達される。相続の様式は多様であるが、普通不妊の女性は何物も相続することができず、それ以外の人間はそのランクよりも子供の数によって財産の配分を得ることができる。娘は通常息子よりも少量の配分を受けるが、定まった規則はない。

宗 教

祖先崇拜：宗教の中で最も強い要素であり、この領域に固有な特徴も幾つか存在する。

アンドゥリアマーニタ：他の全ての存在に優越し、他の全ての存在がそこから自己の力を得る至高神の名称。ザナハーリとも呼ばれ、領域1よりも明瞭に人格化され、単数であるが、単独で祈願や供犠の対象となることはほとんどない。

供犠：祖先や通常のヴァジンバ（引用者注 伝承的な存在の先住民）に対する供犠は、家長または祈願を行う人によって、偶像や大事なヴァジンバに対する供犠の場合には、正式な司祭によって供犠が行われる。ベツィレウ族では各クランは司祭を有し、メリナ族でも過去には司祭が存在したが、領域1に比べて職務も限られ、地味的な重要性も低い。祖先に対する供犠は、家または墓で行われ、供犠柱はシハナカ族においてのみ用いられている。

聖地：ヴァジンバと結びついた聖地は多いが、聖なる河の観念は欠如している。

ウンビアシ：重要であり、男女いずれもがなることができる。ベツィレウ族では男性で、その能力を前任者より習得し霊の支配下にはないウンビアシ・アンカズ、多くは女性で、普通訓練を受けることはなく霊によって任命されたウンビアシ・アンドゥルの二つの区分がある。この二つのウンビアシの活動と行為は同一であるが、後者の方が高く評価されている。暦（ヴィンタナ）とシキーディ占いは用いられているが、占星術は欠けているように思われる。

憑依：幽霊による憑依であり、かなり多い。メリナ族とシハナカ族には正規の霊媒が居る。ベツィレウ族では、憑依は病気と見なされ、憑依者は託宣を行わない。

死者の処置

昔は、メリナ族とシハナカ族において簡単な土葬が行われていた。ことにメリナ族の首長の遺体は、カヌーに入れられて湖や河に沈められた。現在では全ての部族が、遺体を人目につく場所に建てられた部屋状の墓に納めている。遺体はランバ（絹の布）に巻かれ、墓内の段に置かれる。定期的に墓が開かれて遺体が運び出されて、太陽にあてられ、新しいランバで包み直される。各家族が自分たちの墓を持ち、富者は自己の子孫のために新たな墓を建てる。

死者の魂：死者の魂はアンブドゥルンベ山に行きそこで地上と同じような生活をおくる一方、墓の近くにも居り、しばしば家の聖なる角を訪れると考えられている。メリナ族とベツィレウ族では、王の魂は天界に行って神になり、それ以外の人びとの魂は動物に入り込むと信じられている。ベツィレウ族は、存命する王族と貴族の体内には小さな動物や幼虫が居り、死後それが身体から抜け出して、王族ならへびに、貴族ならワニになると考えており、そのため王の遺体には一種のミイラ化がほどこされる。

領域3 西部海岸・最南部領域

サカラヴァ族 (Sakalava), マハファリー族 (Mahafaly), バラ族 (Bara), アンタン
ドゥルイ族 (Antandroy)

物質文化

村 : 村は、棘のあるサポテンによって南側を防御されているが、北側は開かれており、バラ族を除き、領域2ほどには防御化が進んでいない。砂漠状の土地のため、村は水の近くあるいは水から数マイル離れた場所に設置される。

家屋 : 木の骨組みと葦から成り、地面の上に直接建てられる。最南部では、非常に小さな木製の家屋が見られる。

農耕 : 主要作物は、サツマイモ、現在ではマニオクであり、米はわずかし栽培されていない。キビ、トウモロコシ、タロイモも作られてはいるが、重要ではない。この地方の大半は農耕に不向きな土地であり、農耕の技術も未発達である。

家畜 : 牛、犬、ニワトリ、羊が飼育されている。羊は山羊よりも約100年前に北部にもたらされている。豚は、禁忌となっている。牛は、人びとの生活の中心であり、牛乳は重要な食料となっている。牛とニワトリだけが、供犠される。犬は狩猟と牛の見張りに用いられ、高い価値を与えられている。

衣裳 : 海岸部では男性が腰巻き布よりも筒状の布を纏うこと、最南部ではランバを着ることがほとんどないことを除けば、かつての衣裳は領域2とほぼ同じである。最南部では、男は日常、動物の皮もしくは編み物の帽子を被る一方、その他の地域では男女とも帽子を被らない。

社会組織

クランは社会組織の基盤であるが、他の2領域よりも集団が大きくまた結合も固い。王の土地はクランよりもその家族に与えられているように思われ、貴族クランは存在しない。

王 : 王は絶対君主であり、特別の敬意をもって扱われる。王は、最高裁判官として得る科料の一部と、臣民からの貢租をその収入としている。王は森と牧草地の所有者であり、全部族が地代を払わずにその土地を使用することができる。王は自分の耕地を持ち、平民の土地を没収することはできない。王族の成員は、牛と銀を除き、平民の持つ何物をも獲ることができる。王は戦争の指導者としても振る舞うことがあり、ヴェズ族では王の力は刀に付与されており、その刀を持つ者が王となる。王の使者などから成る宮廷集団が存在し、それらは特定のクランに限定されない平民である。

(引用者注) ここでも確固とした王を頂点とした組織を持つサカラヴァ族とクランもしくはクラン連合以上の政治的統合地域を持たないそのほかの民族を同一領域に入れることの齟齬が、浮かび上がっている。そのために、〈王〉と〈クランの長〉とを同一視して記述する結果を生じている。

奴隷：数は多く、社会的な地位は領域2と同じ。

婚姻：普通はクラン内婚であるが、定まった規則はない。姉妹の子供同士および半兄弟と姉妹同士は結婚できないが、兄弟の子供同士および交叉イトコの結婚は、是認されている。家族は厳格な父系であり、階層間婚姻ではたとえ母が奴隷であったとしても、子供は父のクランに属する。結婚の儀式は、領域1や領域2と同じ。

離婚：男女双方の同意によって行われる。財産は分割され、妻も牛の半分を受け取る。妻の側の過失による離婚では、財産の分与はなく、逆に夫の側の過失による離婚ならば妻は全財産を得る。離婚した妻は、その再婚について前夫の同意が必要であり、離婚の理由によって、前夫は妻と再婚男性との間に生まれる子供3人までを養取し、実子とする権利を持つ。

財産と相続：耕地は各個人によって保有されるが、休耕のままに置かれた場合には村会が没収し、再配分を行うことができる。集団内でも土地が売却されることは、希である。あらゆる種類の財産が、性別と母の序列に関係無く、子供たちの間で均分され、母親は子供の管財人としてその財産を保有し、運営する。

宗 教

祖先崇拜：著しい。各クランは、世襲的な儀礼司祭とその補佐役を有する。供犠司祭は、クラン成員とクランの祖先との媒介的な役割を果たす。

アンドゥリアマナナーリ：至高の存在で、比較的明瞭に人格化されている。空の上に居まし、祖先はアンドゥリアマナナーリと共に大半の時を過ごし、そこからその力を得ている。単独の祈願の対象とはならない。南部の部族は、アンドゥリアマナナーリに対し多大の敬意を払うと同時に、第2の霊的存在を崇めている。

アンドゥリアマンドゥレシ：この神は、地上あるいは地中に居まし、嵐や病気などあらゆる種類の悪を送ってよこす。人に憑依する幽霊は、何らかの形でこの神からその力を得ているという漠然とした考え方があつた。タマリンドの樹の下で、この神に対する供犠が行われる。

供犠：祖先に対する供犠は、聖なる杭の下で行われる。

聖地：聖地、とりわけ聖なる樹木の数が多いが、司祭を有さず、そこで崇拜される存在の性格もアンドゥリアマンドゥレシを別にすれば、元々は曖昧である。マハファナーリ族の中の少なくとも1つのクランは、そこに全成員のへその緒を埋める聖なる樹を持っている。

ウンビアシ：極めて重要であり、常に男性がつとめる。彼らは、お守りを作り、暦（ウインタナ）とシキーディ占いを操作し、中には占星術を習得している専門家もいる。ある者は憑依を行い、またある者はそこから自分の力を引き出し供犠の対象とする強力な呪物を自分の家に保管している。ウンビアシと司祭との区別は明確であり、ウンビアシが司祭職を継承する際には、ウンビアシを辞めなければならない。さもなければ、邪術師の疑いをかけられる。ウンビアシは、祖先への直接の供犠を行わない。

憑依：たいへんに発達しており、多くの場合死んだ王の霊によるものであるように思われる。

死者の処置

北部ではあちこちに分散した墓地に、遺体は単独で地中に埋葬されるのが原則であり、南部では死者は石造りの墓の大きな区画に埋葬される。後者の場合、夫と妻、あるいは両親と子供は同じ区画に埋葬してもかまわないが、単独葬が原則である。南部の墓は、目立つ場所にある。北部の集団は、死んだ首長からその頭蓋骨、歯、爪の一部から成る遺物を取り出し、墓の家に保管し、定期的に取り出して包み直す。

死者の魂：空に行き、そこでアンドゥリアマナナーリと共に暮らしている。邪悪な魂は、アンドゥリアマナナーリに近づくことが許されないため、地上を彷徨うことを余儀なくされる。ある集団は、領域2と同じように、死者の魂の動物への変身を信じている。

リントンの文化領域論は、民族学および文化人類学的な訓練を積んだ専門家によるマダガスカルの広域的探査の成果であり、体系的に収集した資料に基づいて構築された初めてのマダガスカル文化・社会の下位区分の試みであった。この点については、今日なお正當に評価されねばならない。グランディディエ、デカーリ、デシャンたちは、マダガスカルにおける滞在年月、マダガスカル語の能力、マダガスカルの人文・社会・自然についての知識など、マダガスカルをめぐる多くの基礎教養の点においてリントンをはるかに凌駕するが、全員民族学や文化人類学についての〈素人〉であり、デカーリとデシャンの二人は植民地行政官でもあった。マダガスカルの文化や社会の多様性を幾つかの地域に区分すること自体は、多くの研究者が行ってきたものの、リントンのように各細目毎の資料提示に基づいた論議を展開しているわけではない。また、リントン以外の研究者たちは、マダガスカル文化の斉一性ないし共通性論を批判するために領域的下位区分を設定するという明確な目的意識を有しているわけでもなかった点は、強く留意されなければならない。

4 民族誌『タナラ族 マダガスカル山地民』

リントンが遺したマダガスカルの人びとに関する民族誌ないし単独著作は、1933年に刊行された『タナラ族』の1冊のみである。当初、『タナラ族』を皮切りに、同じような構成の民族誌を他民族についてもシカゴ自然史博物館から順次出版してゆく計画であった。続刊の民族誌が刊行されなかった理由とは別に、なぜリントンは、マダガスカル調査の最後の2ヶ月間で行ったタナラ族調査の結果を、最初の民族誌として刊行したのであろうか。タナラ族とその文化には、フランス植民地化以前のマダガスカル文化全体が凝縮されている、あるいはタナラ族の文化は古いマダガスカル文化を表わす原型であると、リントンは考えていたことこそが、その理由であろう。このことは、「前書き」や「序論」から、明瞭にうかがい知ることができる。

タナラ族は、その文化が多くの点において原始的 (archaic) であり、かつまた現在なおヨーロッパ人との接触による影響をほとんど受けていないために、シリーズの最初の1冊として出版されることとなった。そのほかの部族についての民族学的著作は、順次発表される予定である。マダガスカルは、自然史博物館がマレー民族学に対して以前から抱いていた関心の一環として、調査地に選ばれた。この島はマレー民族の最西端の到達地であり、そこにおける調査は、初期マレー文化をより明かにするものと期待された。その他に、マレー人の定住や、マダガスカルとアフリカ双方においてマレー文化とアフリカ文化との実際に起きたであろう相互影響など、多くの解けない問題がマダガスカルには残されている。これら諸問題の最終解決にはより多くの比較研究を待つしかないが、マダガスカル島への定住はマレー人の方が古いことや、その結果マレー文化がこの島にあるアフリカ型の新しい諸文化に先行することの兆候は、数多く存在する (Linton 1933: 15)。

タナラ・メナベの文化は、ほとんどの細目において依然として一貫性を保っており、比較的最近になって高地からこの地方に移住してきたザフィマニリ族が、唯一の例外である。他のマダガスカル諸文化と比べた時、タナラの文化は割合単純であり、かつまた原始的 (archaic) であると私は思う。多くの点において、タナラ族の文化は、その伝統に示されるように、より進歩した部族の古い文化と極めてよく一致する (Linton 1933: 19)。

現在の文化／社会人類学から見れば、「初期マレー文化」や「原始的 (アルカイック)」の概念や用語は、書かれた1930年代という学問的時代を嫌でも彷彿とさせる。あるいは、タナラ族ひいてはマダガスカル住民に対するリントンの視点が偏向していたこと自体は、否定しようがない。しかしながら、さまざまな時代にさまざまな起源の小集団がタナラ族の土地にやって来たにもかかわらず、またタナラ族の内部が社会的また文化的に決して一つではないにもかかわらず、外から〈タナラ族〉と一括して名指される〈民族〉を形成するに至ったことは、マダガスカル人そのものの形成過程とも照応する部分がある。すなわちリントンは、タナラ族を植民地化以前のマダガスカル人全体の縮図ないし凡例

と見なし、意図して『タナラ族』を最初の一巻として刊行した可能性が高いと言えよう。

次に、『タナラ族』の目次を、これも一部章の細目については省略した上で、一覧してみよう。

- I. 序論
- II. 地域の自然
- III. タナラの原住民
- IV. 現在の部族の構成と起源
- V. 経済生活
 - 食料資源・食事の準備・アルコールと麻薬・生産品・住居・衣服・運搬・交易・森林産物・財産と相続
- VI. 社会組織
 - 家族・リニージ・村落・氏族・社会階層・婚姻規制・レヴィレート・持参財の重要性・階層間婚姻とランクの継承・関係名称
- VII. 統治組織
 - メナベ地方・イクング地方・メナベ地方の法体系
- VIII. 宗教
 - 信仰・死と埋葬・祖先崇拜・ウンビアシ・邪術・ファディ
- IX. 武器と戦争
 - 武器・戦争
- X. 娯楽
 - 玩具とゲーム・楽器
- XI. 芸術
- XII. 個人の一生
 - 受胎・妊娠中の禁忌・出産・胎盤の始末・子供の運命・命名・子供の世話・割礼・私生児の地位・孤児と養子・絶縁・親の権威・幼少期・思春期・子供の家・貞操・インセス・女装者・結婚・婚約と結婚の儀式・複婚・離婚・再婚・血盟キョウダイ・老年・自殺・死に対する態度
- XIII. 諺
- XIV. 伝説
- XV. タナラ・イクング地方の戦争
 - タナラーフヴァ戦争・タナラーフランス戦争

この目次を見るだけで、『タナラ族』が現代の文化／社会人類学者によって「民族誌」と呼ばれるものと異質な記述であることは、一目瞭然である。この目次に溢れる網羅性

と体系性は、ボアズとその弟子たちが、アメリカ先住民の調査を遂行してゆく中で練り直し洗練していった質問票ないし調査項目表が、リントンのマダガスカル調査においても存分に活用されたことを明瞭に物語っている。「アルコールと麻薬」、「子供の家」、「女装者」などの細目は、アメリカ先住民に対する質問項目表がほぼそのままマダガスカル現地においても適用されたことを偲ばせると共に、「ウンビアシ」、「ファディ」、「血盟キョウダイ」などの細目は逆に、実際の調査の過程の中で、リントンが臨機応変に調査事項を選択していたことを示している。

この『タナラ族』は、1つの完結した民族誌の成果ないし作品として本来は読まれるべきではなく、リントンが予告したように、マダガスカルの他の民族についての同様な民族誌全巻が完結してはじめて、ボアズから引き継がれ、その弟子のウィスラー、ローウィー、ゴールデンワイザー、スチュワードたちによって完成された『アメリカ先住民ハンドブック』の小型版『マダガスカル先住民ハンドブック』としてその全貌を現わしたはずの書誌の一章を成すものと考えることが妥当であろう。

5 リントン文化領域論の与えた影響とその評価

5.1 フランスの民族学者ラヴォンデスによる批判

リントンのマダガスカル文化領域論に対しては、後に南西部のマングキ河 (Mangoky) 流域でマシクル族 (Masikoro) の調査を行ったフランスの民族学者ラヴォンデス (Henri Lavondès) が、1967年に出版した自らの民族誌の中で公然と批判を加えている。ラヴォンデスによれば、リントンの文化領域設定は、次の3点において全く皮相なものではないと言う。

- a) 数多くの細部の誤り。例えば、アンドゥリアマンドゥレシを、神と同一視していることなど。
- b) 不完全な文献資料に依拠していること。しかしリントンの調査当時、マダガスカルの各民族に関する民族誌のほとんどが刊行されていなかった事情については、考慮されるべきである。
- c) 各文化領域の内部において、文化特色の細目を分析するとその地域的区分は、マダガスカルの現実の複雑さを十分に説明することのできない過度の単純化であること。例えば、領域3における婚姻の特徴「普通はクラン内婚であるが、定まった規則はない。姉妹の子供同士および半兄弟と姉妹同士は結婚できないが、兄弟の子供同士および交叉イトコの結婚は、是認されている」(Linton 1928: 387) は、マハファーリ族、アンタンドゥルイ族、バラ族については当てはまるが、ラヴォンデス自身が調査を行ったマシクル族の村において機能している婚姻体系は、領域2のベツィレウ族について「男系および女系出自上の4世代内の先祖を共にす

る男女の結婚を禁止している」(Linton 1928: 379) とリントンが述べたそれによって特徴づけられる。この2つの異なる婚姻体系は、マダガスカル全島に広がっている一方、同一地域や同一村内でも共存している。さらにリントンが領域3と規定した地域内においても、その親族名称は兄弟姉妹やオイ・メイ名称などについて極めて不均質である。

以上の3点より、ラヴォンデス自身が調査観察したマシクル族の事実を、領域3として一般化することはできないと主張している (Lavondès 1967: 16-19)。

しかしながら、1926年から2年をかけてほぼマダガスカル全島の広域調査を中心に行ったリントンと、1961年から2年をかけてマングキ河下流の数ヵ村において集中調査を行ったラヴォンデスとは、文化領域に対する接近の仕方が全く正反対である点に注意しなければならない。すなわち、リントン自身は、地域や部族やクラン毎の差異を無視した〈マダガスカル人〉や〈マダガスカル文化〉という包括性を批判するために、「一般に想定されているマダガスカル文化の単一性は神話である」(Linton 1928: 390) ことを明らかにするために文化領域論を要請し設定したのに対し、ラヴォンデスにとっては、そのような文化領域の設定そのものが村落レベルの視点からは、極端な一般化と捉えられているのである。

5.2 アメリカ文化人類学によるマダガスカル研究への影響 (1)

マードックの人類アフリカ文化史系統論

マードック (George Peter Murdock) は、マダガスカルにおいて調査を行ったわけではないものの、アフリカの民族の文化史系統を論じた1959年の本の中で、「第7部 インドネシアの文化的影響 27章 マダガスカル人」と題する1章全てを、マダガスカル島への人の移住とそのアジア・アフリカ双方の歴史系統および現住民族との関係についての記述に充てている。この章の中で、マードックは、マダガスカルの各民族を幾つかの区分に纏めている。

多くのマダガスカルの部族は、便宜上以下の11の主要な集団にまとめることができる。

1. アンタイサカ (タイサカ, テサキ) : 隣接するアンタイムル (アンタイムルナ, タイムル, テムル), アンタンバファアカ (タンバファアカ), アンタイファシ (アンタイファシナ, タイファシ, テファシ) を含む。彼らの人口はおよそ42万人であり、昔のアラビア系の形質的特徴および文化的特徴の顕著な流入を示している。
2. アンタンドゥルイ (タンドゥルイ) : 隣接するアンタヌシ (タヌシ) を含む。彼らは、およそ39万人。
3. バラ : 類縁のバラベ, イمامス, サウツアウトゥラ, ティムンジ, ヴィンダを含む。彼らは、およそ18万人。
4. ベツィレウ : アリンドゥラス, イラランギーナ, イサンドゥラ, マナンドゥリアナを

含む。彼らの人口は、およそ50万人。

5. ベツィミサラカ：ベタニメーナを含む。彼らの人口は、およそ63万人。
6. マハファーリ：彼らはおよそ8万人の人口を擁する。
7. メリナ（アンティメリナ、フヴァ、イメリナ、ウヴァ）：形質においてマレー系の顕著な高原の民族（people）であり、1600年頃から近隣に対し政治的覇権を及ぼしている。その現在の人口は、およそ100万人。
8. サカラヴァ：アンタンカラナ、アンティブイナ、アンティフィヘーレナ、アンティマイラカ、アンティマラカ、アンティメーナ、アンティミランザ（アンタンブング）、ヴェズを含む。彼らは、形質的にはおそらくマダガスカルの中で最もニグロイドの特徴が強いものの、インドネシア型アウトリガー・カヌーを現在でも保持しているマダガスカル内唯一の集団である。彼らの人口数は、およそ30万人。
9. シハナカ（アンティシハーナカ）：彼らの人口は、およそ8万5000人。
10. タナラ（アンタナラ）：イクングとメナベを擁し、隣接するベザヌズ（アンタイヴァ、アンタカイ、タンカイ）をも含む。彼らの人口は、およそ20万人。
11. ツィミヘティ：彼らの人口は全部で、およそ30万人。

マダガスカルの諸民族は、主にその生業（basic economy）に基づいて、4つの下位区分に分かれる。内陸高原、東海岸、内陸高原と東海岸の間の断層崖、および、島の最北部と最南部を含む西海岸の平原である。高原の部族（ベツィレウとメリナ）は、副次的な家畜飼育を伴う灌漑稲作に主として依存している。東海岸の民族（アンタイサカとベツィミサラカ）は、漁撈と家畜飼育を伴う陸稲焼畑によって生計をたてている。（内陸高原と東海岸の間の）断層崖の民族（シハナカ、タナラ、ツィミヘティ）は、両者の中間的な位置にあり、多くの点において陸稲作から水稲作への転換の初期の状態によって特徴づけられる。（西海岸の）平原の民族（アンタンドゥルイ、バラ、マハファーリ、サカラヴァ）は、牛牧畜民であり、海岸部では漁撈に大きく依存し、また農業への依存度合いは低い（Murdock 1959: 216-217）。

マードックは、当然とはいえリントンが用いることのできなかった1930年代以降に出版されたフランス語の民族誌を、的確に利用している。しかしながらマードックは、アフリカ大陸の人びととマダガスカル島の人びとが、形質的また文化的にどのような歴史的な関係にあったかについて記述することを主眼に置いている上、自身はマダガスカルにおける調査経験を全く持たなかったため、その民族の11区分はかなり特異な分類となっている。一方、生業に基づいた4区分は、シハナカ、タナラ、ツィミヘティの3つの民族を内陸高原と東海岸の間の断層崖の民族としてひとまとめにし、陸稲焼畑から水稲水田稲作への転換局面にあることを明かにした点にマードック独自の特色が見られる他は、リントンの文化領域区分をほぼそのまま踏襲する形となっている。マードックの27章の参考文献には、リントンの文化領域論の論文およびタナラの民族誌の2つが挙げられていることも、その影響をうかがわせる。

5.3 アメリカ文化人類学によるマダガスカル研究への影響 (2)

サウゾールによる『アメリカ人類学雑誌』小特集

1971年発行の『アメリカ人類学雑誌』73巻において、アフリカ研究で名高いサウゾール (Southall 1971) が責任編集する「マダガスカルにおける親族関係、出自と居住」(Kinship, Descent, and Residence in Madagascar) と題する下記の3論文を載せた〈マダガスカル小特集〉が組まれた。

- 1) Aidan Southall, “Ideology and Group Composition in Madagascar”, pp. 144-178.
- 2) Conrad Phillip Kottak, “Social Groups and Kinship Calculation among the Southern Betsileo”, pp. 178-193.
- 3) Peter J. Wilson, “Sentimental Structure: Tsimihety Migration and Descent”, pp. 193-208.

この小特集の巻頭論文の中でサウゾールは、マダガスカルの民族と文化の低位区分との関係およびリントンの調査と著作の意義に触れ、次のように述べている。

複数の異なる文化の観点からマダガスカル人の親族を比較することは、そこに関わってくるマダガスカル人の文化単位の特徴について幾つかの問題を呼び起こさずにはおかない。全てのマダガスカル人は、同一言語の様々な方言を話している。20ほどの民族集団を区別することが、慣習的に行われているものの (Deschamps 1961: 294)、これらの民族集団の名称のほぼ全てが、外部の人間 (foreigners) によって与えられてきたものであり、ごく少数の名称だけが、植民地化以前に自称詞として用いられていたにすぎない。17世紀のルイス・マリャノ神父のような初期のヨーロッパ人の旅行者たちは、河の名前、統治者の名前、王国の名前、あるいは王の住む村の名前によって、人びと (populations) を区別していた (Grandidier *et al.* 1904)。タナラ、アンドゥルイ、タヌシ、シハナカ、テファシ、アンカラナ、サカラヴァなど部族の名称と言われるものの多くは、生態的な名付けにすぎず、それぞれ、森の人びと、有刺林の人びと、島の人びと、湖の周りの人びと、砂の人びと、岩の人びと、長い谷の人びとを意味するために用いられてきた。さらに、幾つかの民族名称の起源については、疑わしいものがあり、議論の対象となっている。これらの民族名称のいずれもが、政治的に中央集権化されたり統一されたりしたことがない。18世紀以前はこの名で知られていたわけではないが、メリナだけが植民地化以前に中央集権化され統一されていた。

それゆえ、文化的区分や文化的境界 (cultural boundaries) の根拠は大なり小なり恣意的なものであり、マダガスカル人とは単一の主題の上の変異 (variations on a single theme) であるとの仮定へと導くことにもなる。海岸、半砂漠、森林、山の多い高原といった生態系の大きな違い、および漁撈、牧畜、キジ栽培、陸稲栽培、灌漑耕作といった生活様式の大きな違いは、社会組織や文化の諸特徴に反映される可能性を有している。インドネシア系から派生した顕著な同質性の一般的な印象にもかかわらず、とりわけアラブやスワヒリの他の

影響の証拠も豊富に存在する。それゆえ、各地域における放散 (divergences) もおおいにありうることである。以上のように、これまでの文献において慣習的に部族と扱われてきた民族の名称は、しばしばよそ者によってそれらの名称が与えられてきたにせよ、遅くとも19世紀頃からは自分たち自身をそのような名称で認識する地域的な集団分けを指すために用いられうるであろう。これらの名称で呼ばれる人びとは、内部でかなり大規模な移動を繰り返してきたにせよ、互いの集団および外部の影響に対してさまざまな反応と受容、多様な政治的な歴史を伴っており、それによって多くの場合広範囲に広がり互いにはっきりと隔てられていた人びととして、異なる生態的な適応を表している (Southall 1971: 144-145)。

昔のイギリス宣教師たちを別にすれば、リントンの著作はおそらく、マダガスカル文化に関する英語圏の人びとの本格的な参入であると同時に、専門的人类学者による最初の著作であった。リントンの洞察力およびマダガスカル全島の精力的な踏破は、他に並ぶもののない文化的関係と文化史に関する見取り図を確立した。……タナラについての彼の集約的調査は2ヶ月間であり、物質文化や個人のライフ・サイクルについては詳細である一方、社会組織については、総計300頁以上の中でわずか15頁が充てられているにすぎない。一方、1938年のベツィレウについてのデュボワ神父の記念碑的著作も、家族生活の素描に1500頁の中の60頁を費やしているにすぎない。リントンは、部族、氏族 (gens)、亜氏族、リニージの概念図式の下にタナラの社会構造を記述している。彼は、タナラとタナラの多数の下位区分の双方に対して部族の語を適用し、部族という単語の用法に揺らぎを見せている。後の1939年の論文において彼は、氏族をクランに置き換えた一方、ザフィマニリをクランと部族の2つの単語で呼んでいる (Linton 1939: 284) (Southall: 1971 145-146)。

サウゾールは、慣習的な部族や民族集団の名称による区分の実体性について疑問を投げかけ、マダガスカルにおける人びとの文化や社会の多様性や相違は、その居住する生態環境に対する適応によって生じたものであるとの見解を表明している。リントンの文化領域区分に直接言及しているわけではないものの、その区分に理論的な根拠づけを与えたとも言える。この見解は、1971年のコタック (Conrad Phillip Kottak) の論文において「文化適応」論としてさらに明確に述べられることになるだけでなく、サウゾール自身も1975年の論文の中でリントンのタナラ、とりわけザフィマニリ研究について触れ、「もしリントンが〈森に対し適応した〉ことだけを述べていたとするならば、彼の全体的な内的発展の議論は破綻する。しかしながら、彼が〈適応した〉ことを内的な生態的变化と社会的変化双方の結果の一部であると考えていたなら、さまざまな事実が彼を反駁することになる。彼の仮説は明らかに、1つの集団から他の集団への政治的な観念の伝播や農業技術の伝播などではなく、環境との人間集団の相互作用における内的発展の動態を意味している。タナラがベツィレウの影響の下に灌漑や王制を発展させてきたと考えるのか、それともただ単に人びとがベツィレウからタナラへと移住し、すでに慣れ親しんでいた制度や慣行をその場に作り出したと考えるのか、彼の仮説に残された余地はないであろう」と述べ、この適応論の可能性について検討を加えている (Southall

1975: 605)。

5.4 アメリカ文化人類学によるマダガスカル研究への影響 (3)

コタックの文化適応論

リントンの文化領域区分の設定から43年後、南部ベツイレウの現地調査を行ってきたコタックは、「さまざまな地域環境およびさまざまな地域的接触と交換の歴史的形態に対する適応の社会-文化的方法と人間の双方を含む適応放散 (adaptive radiation) の視点から、マダガスカルの文化・社会的多様性に接近する」(Kottak 1971: 129) ことを目的に、新たに民族単位 (ethnic unit) を6つの文化適応型に分類した。コタックの主張の基礎は、祖型集団 (parental group) から分かれた多くの下位集団が、さまざまな新しい環境に居住することにより、多様化への再分化をも含む進化的過程として適応放散することの概念にある (Kottak 1971: 130)。そして、その祖型集団には、以下の共通の特徴を持つとされる原マダガスカル人 (proto-Malagasy) を措定した (Kottak 1971: 134)。

1) 父系に偏重する出自集団, 2) 母方出自集団への選択的帰属, 3) 夫方居住の優先, 4) 〈血キョウダイ〉と言う擬制的親族関係, 5) ハワイ型イトコ名称と世代型名称, 6) 祖先崇拝, 7) 遺体の一部分を取り出し遺物として祭祀する習慣, 8) 割礼, 9) ある領域の土地と人に対し権限を持つムパンザカ (王) の存在, 10) アンドゥリアナハーリと呼ばれる霊的存在の信仰。次に、この祖型集団が、メリナ王国の拡張などの要因によってマダガスカル島各地域に分散し、その地域の自然的また歴史的な条件と状況に適応した結果、次の6つの文化的適応型が生じた (Kottak 1971: 134-145)。

- タイプⅠ 河岸農耕民と儀礼的職能者 (南東海岸部): アンタイサカ, アンタイムル, ザフィスル, アンタイファシ, アンタンパファカ。
- タイプⅡ 沿岸交易国と政治的連合国家: サカラヴァ, ベツィミサラカ, アンタヌシ。
- タイプⅢ マダガスカル型牧畜民 (南部・西部): バラ, マハファーリ, アンタンドゥルイ, 内陸サカラヴァ, 内陸アンタヌシ。
- タイプⅣ 熱帯森林の焼畑耕作民 (東部断崖): タナラ, 内陸ベツィミサラカ。
- タイプⅤ 灌漑農耕民 (中央高原): メリナ, ベツイレウ。
- タイプⅥ 牧畜と菜園農耕複合 (北東部・北部): ツィミヘティ, アンタンカラナ, シハナカ, ベザヌザヌ。

コタックの文化的適応型の区分で目をひくのは、これまで1つの民族として扱われることが普通だったベツィミサラカとサカラヴァとアンタヌシを、内陸部に住む人びとと海岸部に住む人びとの2つに区分したことである。また、タイプⅡは生態環境への適応よりも歴史的な生業と政治的統合形態を重視した、コタック独自の区分である。その一方、タイプⅡを除けば、リントンの文化領域の区分そのものと大きな違いがあるわけではない上、共通の社会・文化的特徴を持つ祖型集団が、定住先の生態環境に適応するこ

とによって、現在見られる多様性と共通性をもったマダガスカル人を作り出したとする
いささか極端な歴史—環境適応論に対しては、実証的な批判の余地が容易に見出される。

5.5 アメリカ文化人類学によるマダガスカル研究への影響 (4) その他

HRAF が編集した『島嶼東南アジアの民族集団』の第1巻の第1章は、わずか3頁ではあるものの、〈マダガスカル〉および〈マダガスカル人〉についての記述に充てられている。

人類学者たちは、マダガスカル島のマダガスカル語話者人口の中に便宜上およそ20の民族集団ないし部族複合を区分している。これらの諸集団は、リントン (1928年) によって3つの文化領域、現行では3つの環境帯 (ecological zones) に分けられている。東部：ベツイミサラカ (915,000)、アンティファシ (40,000)、アンティムル (212,000)。高原：ベツイレウ (736,000)、フヴァまたはメリナ (1,570,000)、シハナカ (135,000)。西部海岸：サカラヴァ (360,000)、マハファーリ (91,000)、アンタンドゥルイ (326,000)、バラ (228,000)。タナラ (237,000)、タンカイないしベザヌザヌ (44,000)、ツイミヘティ (429,000)、アンタンカラナ (420,000)、アンタヌシ (149,000) は、上記の3領域の中間と考えられる。形質的差異および文化的差異は、おおよそこの三区分と相関しており、とりわけ生業 (basic economy) について相関が高い。東部海岸の部族は、主に焼畑稲作に依存している。高原の部族は、棚田稲作に依存している。西部海岸の人びとは、主に牧畜と漁撈に依存している (Murdock 1959)。1928年の論文においてリントンは文化的多様性を強調したが、サウゾール (1971) は、マダガスカル人の〈部族〉の多くが、さまざまな生態的適応および外部との混交の度合いを経た基本的に類似の文化的基盤に立つ地域的なまとまりを実際に表しているのかについて、疑問を投げかけた (Lebar 1972: 2)。

上記の解説は、とりたててマダガスカルの人びとについての得意な下位区分を主張しているわけではなく、リントンとサウゾールの研究を援用しただけの記述に留まっている。

6 リントンによる文化領域論設定の意義と問題点

再度、リントンによるマダガスカル文化領域区分の意義と問題点について、箇条書きにまとめてみよう。

- a) 大雑把な生活感覚や日常経験ではなく、詳細な質問項目表や調査表に基づいた細目の比較検討に立脚し、領域区分がなされた初めての試みであること。
- b) 文化領域の設定には、文献資料の情報よりも、リントン自身の当時の広域的な調査経験が直接に反映されていること。
- c) a) と b) によって、マダガスカルの文化的・社会的な多様性が、系統的に提示されていること。
- d) 「文化領域」と名付けていても、その地図上に投影された領域は、リントン自身も

認めているように、マダガスカル島の生態環境の区分ないし気候帯の区分とその多くが一致すること（図2参照）。

- e) リントンのマダガスカル語を習得せず、質問項目表や調査表を駆使し通訳に依存した調査を行った結果、細目の具体的な記述にはしばしば疑問が付けられること。
- f) フランス植民地支配が地方にまで確立してゆく当時のマダガスカルの人びとの生活およびフランス支配に対抗する〈マダガスカル人ナショナリズム〉の勃興の様子は、リントンの文化領域の設定と記述にはほとんど反映されていない。その結果、1920年代半ばの〈マダガスカル〉および〈マダガスカル人〉の双方について静態的な印象を強く与えること。
- g) マダガスカルの文化が単一や同質ではないことを提示するために文化領域を設定したというリントンの当初の意図とは反対に、同じ文化領域に囲い込まれたがゆえに、異質なものがあっても等質であるような印象を与える結果にしばしば陥っ

The Climates of Madagascar

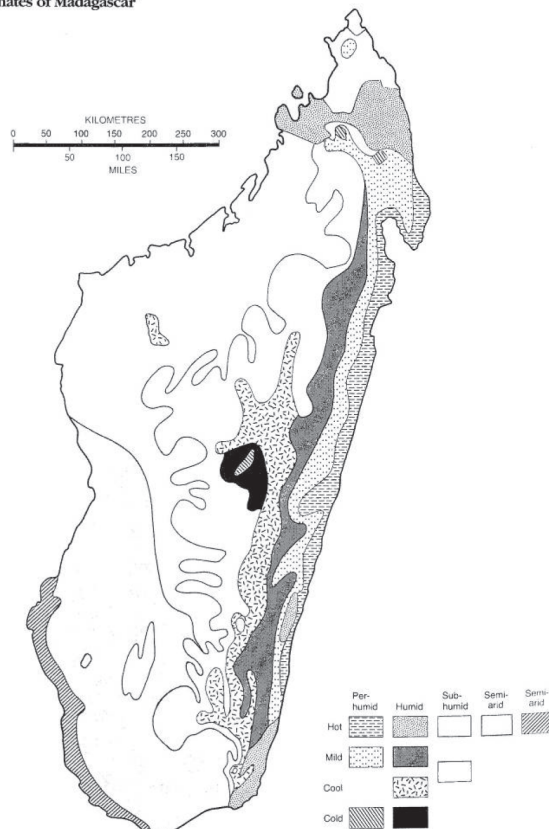


図2 マダガスカル島の気候区分図
出典：Preston-Mafham 1991: 218

ていること。

マダガスカル島の気候区分については、細部において異同があるものの、5から6の領域を区分する説が一般的である。この本の著者の Preston-Mafham は、年間平均気温と年間降水量とをマトリックスして、11の気候区分を設定している。

最後にマダガスカル文化と深い係わりを持つマダガスカル語の方言区分とリントンの文化領域区分との対応について、触れておきたい。マダガスカル語に方言が存在することは、言語学者によってもまたマダガスカル人自身によっても認識されている。しかしながら、マダガスカル語を幾つの方言に区分することができるのかについては、文化領域区分と同様に、実は現在に至るまでほとんど検証がなされてはいないか、言語学研究者の間での合意が形成されていない。自身がマダガスカル語話者でもあると共に社会言語学者のバクーリ (Domenichini-Ramiaramanana 1977) は、マダガスカル語を社会言語学および記述言語学的に概論した本の中において、中央方言・東南部方言・南部一西部方言・東部方言・北部方言の5方言群を設定している。リントンの文化領域区分と対照させると、バクーリの方言区分では、リントンの〈東海岸〉領域の中から東南部方

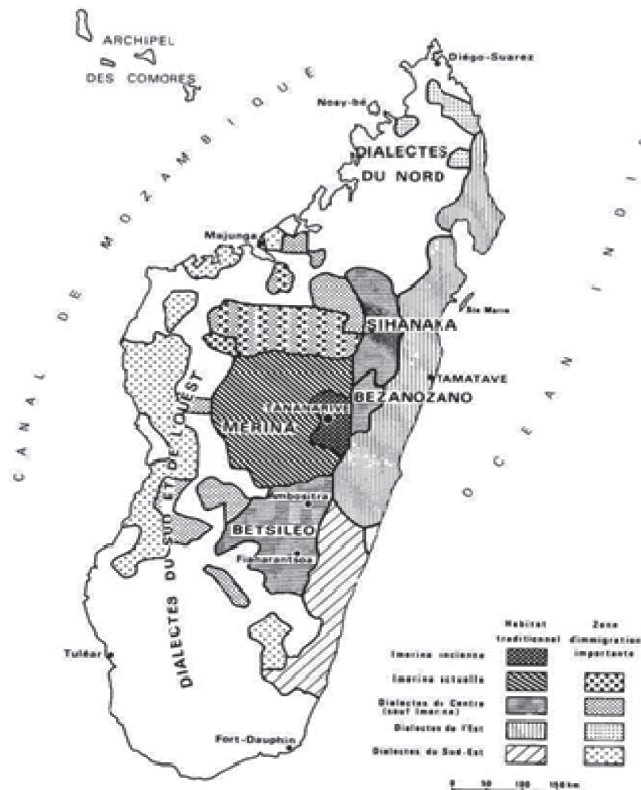


図3 マダガスカルの方言区分と中央方言話者の拡大
出典：Domenichini-Ramiaramanana 1977: 6.

言が独自に設定されていることに一番の相違が認められる。その一方、リントンが混合領域に設定したアンタンカラナとツイミヘティの居住域をバクーリは北部方言と画定し、両者の間に共通性が見られる。このようなマダガスカル語方言の区分が未確定であることを前提としても、リントンの文化領域区分との間に大きな齟齬はないと言えよう。

リントンは、マダガスカルの文化について論じた最も後期の論述（Linton 1939）において、改めて〈マダガスカル〉の人びとの特徴について次のように述べ、「マダガスカルにおける文化領域」1928年執筆時点では仮想敵としていた「マダガスカル文化の同質論」に回帰する論調を見せており、マダガスカルの人びとの文化の同質性と多様性問題が、リントンの中で完全には処理されていなかったことを示している。

マダガスカルの文化は、生態的区分と一致しない文化領域を区分することができるくらい多様である（sufficiently diverse）。マダガスカルの人種（races）は極度に多様であり（extremely diverse）、内婚集団毎のパターンによって促進される極めてさまざまなタイプがある。しかしながら、幾つかの主要な人種上のタイプは、居住域によってある程度分けることができる。高原地域では、大部分の住民は、薄い褐色の肌をした長い波状毛を持ち、かなり濃いひげをたくわえ切れ長の目をした中間的形質（mesocephalic）である。マレーポリネシア語族に属するマダガスカルの言語は、マレー語にたいへんに近似している（Linton 1939: 251）。

マダガスカルの人々は、島に上陸した当初から現在に至るまで、さまざまな理由によりさまざまな規模の移住や移動を繰り返してきている。したがって、仮に民族の実体論自体にいて問わないにせよ、ある民族集団がマダガスカルの地図上の特定面積を占め、それら複数の集団が島の生態的条件に応じて、〈マダガスカル人〉を構成する幾つかの文化／社会的特徴を共有する下位区分を成すというリントンの文化領域論は、マダガスカル島の上で展開されてきた人々の生活・社会・文化・歴史について、いささか固定的あるいは静態的な印象を与える。その結果、千数百年に渡りマダガスカル人が新しい来島者たちをも受け入れながら島の上で繰り返してきた離合集散の動態を軽視させる危険性を、この文化領域論は孕んでいる。しかしその一方、マダガスカル島に住む人びとを等しく〈マダガスカル人〉と捉え、その文化や社会の共通性や斉一性を無批判に設定する人びとに対し、この文化領域の設定は、リントン自身のもくろみ通り具体的な資料を伴った異議申し立てとなっている。さらに、アメリカ先住民の調査研究資料に基づいてその差異を表現する博物館展示を念頭に、文化領域論が生まれた経緯を思い起こせば、マダガスカルの文化や社会あるいは歴史についての展示を行うに際し、このリントンの文化領域は、現在なお言及されるべき有用性を保持していると言えよう。なぜなら、そのさまざまな批判と欠点を考慮に入れても、リントンの文化領域論の細部を支える調査資料と調査経験は、おそらく現在では再現や追体験が不可能であるからにほかならない。

注

- 1) 正確には、ヌシ・ベ島 (Nosi-Be) とサントゥ・マリー島 (Sainte-Marie) は、1896年のフランスによるマダガスカル併合以前に、フランス領となっている。
- 2) グランディディエ (Guillaume Grandidier) による *Ethnographie de Madagascar* tome I-IV は、「民族誌」の名称を冠しているが、自然史もしくは博物誌の系譜に属する民族誌的記述である。
- 3) リントン自身もこのような当時のアメリカおよび英語圏の事情について「この調査隊の成果は、誤った情報に満ちたマダガスカル島を扱ったイギリスやアメリカの大半の本の中では、最も重要なものである。オズボーン氏の『人食い木の島』は最悪だとしても、マダガスカルで長年過ごしてきた宣教師たちの著作にも、誤った記述がよく見られる。宣教師たちが旅行で訪れた地域が通常少数の地域に限られているにもかかわらず、自分たちが見聞した事柄が普遍的だと考えるためである」(Linton 1927: 292) と述べており、信頼できる情報の入手に苦勞した経緯が偲ばれる。

文 献

L'Academie des Sciences d'Outre-Mer

1979 *Hommes et destins Dictionnaire biographique d'Outre-Mer MADAGASCAR Tome III*.
Paris: Publications de L'Academie des Sciences d'Outre-Mer.

Boiteau, Pierre

1982 [1958] *Contribution à l'histoire de la nation malgache*. Paris: Editions Sociales.

エスアベルマンドルウス, M.

1988 「マダガスカル, 1880年代から1930年まで—アフリカ人の主体性と植民地征服・支配に対する抵抗」深澤秀夫訳『ユネスコ アフリカの歴史』第7巻, pp.321-369. 京都: 同朋舎。

Condominas, George

1960 *Fokon'olona et collectivités rurales en Imerina*. Paris: Editions Berger-Levrault.

Decary, Raymond

1933 *L'Androy: Extrême Sud de Madagascar*. Paris: Société Editions Géographique, Maritimes et Coloniales.

Deschamps, Hubert

1936 *Les Antaisaka: Géographie humaine, coutumes et histoire d'une population malgache*.
Tananarive: Pitot de la Beaujardiere.

Domenichini-Ramiaramanana, Bakoly

1977 *Le Malgache: Essai de description sommaire*. Paris: SELAF.

Dubois, H. M.

1938 *Monographie des Betsileo, Madagascar*. Paris: Institut d'Ethnologie.

Faublée, Jacques

1953 *La Cohésion des Sociétés Bara*. Paris: Presse Universitaires de France.

Gillin, John

1954 Ralph Linton. *American Anthropologist* 56: 274-281.

- Grandidier, Alfred and Guillaume Grandidier
 1904 *Ethnographie de Madagascar*. tomes I-IV. Paris: Imprimerie National.
- Kottak, Conrad P.
 1971 Cultural Adaptation, Kinship and Descent in Madagascar. *Southwestern Journal of Anthropology* 27: 129-147.
- Lavondès, Henri
 1967 *BEKOROPOKA, Quelques aspects de la vie familiale et sociale d'un village malgache*. Paris: Mouton.
- Lebar, Frank, M. (ed.)
 1972 *Ethnic Groups of Insular Southeast Asia Volume 1: Indonesia, Andaman Islands and Madagascar*. New Heaven: Human Relations Area Files Press.
- Linton, Ralph
 1927 Report on work of field museum expedition in Madagascar from January to September 9, 1926. *American Anthropologist* 29: 292-307.
 1928 Culture areas in Madagascar. *American Anthropologist* 30(3): 363-390.
 1933 *The Tanala, a hill tribe of Madagascar*. Chicago: Field Museum of Natural History.
 1939 The Tanala of Madagascar. In Abram Kardiner and Ralph Linton *The Individual and His Society*, pp.251-290. New York: Columbia University Press.
- Murdock, George Peter
 1959 *Africa: Its Peoples and Their Culture History*. New York: McGraw-Hill.
- Ottino, Paul
 1963 *Les économies paysannes malgaches du Bas-Mangoky*. Paris: Editions Berger-Levrault.
- Preston-Mafham, Ken
 1991 *Madagascar: A Natural History*. Oxford: Facts On File Ltd.
- Southall, Aidan
 1971 Ideology and Group Composition in Madagascar. *American Anthropologist* 73: 144-178.
 1975 Ecology and Social Change in Madagascar: Linton's Hypothesis on the Tanala and Betsileo. *American Anthropologist* 77: 605.